随想

あのころ

藤浦　洸

京都の町も　御所を上ると　もう田甫のある田舎だった。五十年前、私が同志社に入学したころである。同志社の赤い煉瓦の建物は　その緑の間にぽつぽつと散ばってあった。校舎自体が　今のように　ぎっしりつまってなくて、チャペルや　神学館など　五つ六つの建物と建物の間が　樹々と緑の芝生だった。クローバーが　いっぱいあった。

「今日は天気がいいですから　外で　やりましょう」と、先生が　学生を外につれ出して、芝生の上で　講義をした。車も通らないし　人も歩かない　何のディターブするものもなかった。相国寺の　勤行の　鐘が鳴り出したり、竹やぶの雀の囀りが聞えたりした。この時代の風物は　徳富芦花の「黒い眼と茶色の眼」にみごとに書き出されている。あの小説は　どういうものか世間で高く評価されていないが　私は「不如帰」や他の小説より　高く買っている。そのうち　世の中に　再認識を求めたいと思っている。

私は神学部に入学していた。この話をすると　みんな笑いだすし、現に　去年　同志社の文化祭で講演した際　そういうと、学生が一斉に　笑い出した。笑われても仕方あるまいが　当時は　それ程　熱心なクリスチャンであった。神学部の寮は　西寮といって　今の烏丸今出川の　あの広い交差点のところにあった。寮のとなりに風呂屋（といっても学生だけの　ただではいれる）があり　その隣りに　学生だけが行く　クラブみたいなものがあり、そこで「いもねぎ」というものが名物だった。「じゃがいも」と「玉葱」を脂でいためたもので　二銭だったが　それが　同志社の名物であり　私共には　とてつもなくうまいものであった。

寮の生活は楽しかった。夜　自習時間が終ると　誰かが　まず発声して「ぽつぽつ　まいりましょう」歌い出した節は「メリー　ハズ　ア　リットル　ラム」で「まいりましょう　まいりましょ　うどんやえ」ということになり　五、六人で表のうどんやで　亀山と　きつねを食べた。昔は　うどんやに　甘いものも売っていた。月末には　借金がたまって　弱ったことがあった。後　共産党の大物になり、現在は　転向して働いている直井武夫や　文学部長になった竹中勝男や　音楽評論家の小泉浩や　後の人は　もう老牧師になって教会のために働いている人たちである。私

も　テレビに出るようになってから　そういう人たちの　思い出をなつかしむ手紙を貰っている。

私は間もなく　慶応義塾の　仏文科に転校したが　同志社も　慶応も　五十年前のしっくりとした雰囲気がなくなってはつまらないと思うが、日本では　そういうわけに行かないのだろうか。イートンや　オックスフォードのように、いつまでも　昔の気分を　守っていけないものだろうか。

（校友・詩人）

気にかかること

田中弥市郎

単調なことこの上なく、それだけにかえって神経を摩耗することおびただしい入試採点中に、ともあれ一服の清涼剤といえるのが例の珍答案であることは確かだ。もっとも最近は受験生の水準が、一般に目に見えて向上しているし、その上世道人心おしなべて世知辛いというのか、以前のようにいさぎよい白紙の出てくることも少なくなったし、古臭すぎて面白くもないあのダルマの絵なんかにも、近年ほとんどお目に掛らないようだ。それでもやはりずい分考えあぐねた末かとしのばれる珍答にしばし苛酷なノルマを忘れることも少なくはない。

幸いにこの灰色の期間に縁のない方にもここまではおうよそ御想像がつくかと思われるのだが、何万という中には決して笑いごとでは済まない恐しいのが飛出して来る。一見例の清涼剤と似てはいるのだが、も一度読み直して愕然、慄然としてはだえに粟を生ずるていの代物である。実物をお目にかけるならばまずざっとこんな工合である。

「社会の供給的出現はたゆまづ変りつつ、しかもそれが必須的数量は驚くばかりの馬小屋である」

少し長い英文のごく一部の訳なのだが、これでは何のことかわかるまいから、念のためこれに相当する原文を示すと

The superficial appearance of society is constantly changing, but its essential qualities are surprisingly stable.

一体何がどうなっているのか考えて見ると、思うに「供給的」というのは、ちと強引な解釈かも知れないが supply と superficial の混乱（s・p・l のある所が似ている？）としか考えられそうもない。これに較べれば appearance の「出現」はまだ罪の軽い方かも知れぬ。次の……いやよそう。この際原文も英文もあったものではない。そもそも「社会の供給的出現」とは全体何のことか、書いた本人にイメージのかけらでもあるのだろうか。「たゆまづ」という副詞はその後に「努力する」とか「働きつづける」とか、まず意志的な言葉がくるのが普通ではないか。「必須的な数量」が「馬小屋」であるに至っては気が狂ったとしか思いようがないではないか。

この受験生が入学出来るとはとても考えられないけれど、果してそれで片付けてしまえることだろうか。私はどうもその気になれない。というのはこれは単なる学力の不足とはわけがちがうように思えるからだ。もし、「どんな思想が人間の頭脳のう

ちに発生しようと、またそれがいつ発生しようとも、それは言語の素材にもとづいて、言語の語と句とにもとづいて、はじめて発生し存在することが出来る」ということがその逆と共に完全にいい切れるとすれば、ことは誠に重大である。学校なり、受験勉強なりが英語の力をつけるどころか、もし日本語を、ひいてはその人の思考能力を破壊し、気違いじみた非人間化の方向へ馳り立てる手助けをしているとすれば、由々しき大事であるといわねばなるまい。先の例のような単純な構文さえ理解出来ないのは、余程学力の低いひやかし受験生だという人もあろう。しかし事はその学生が入学するしないではなく、また英語や国語の学力の問題とばかり思えないからだ。

いささか唐突ではあるけれど、今年の連休にはわずか一週間の間に五十人以上の人が山で死んだという報道に、朝日の天声人語はこういっている。「こうなると登山者の一部にはどこか考え方に重大な欠陥のある若者がまじっているのではなかろうかという気さえ起る」まさか関係はなかろうが気にかかって来さえするのだ。

ついでながら、先のstableだが、なるほど「馬小屋」という意味もあるから、同志社の問題→キリスト→馬小屋？　というのが私たちの到達した人間的推理であった。

（文学部専任講師・英文学）

後　光

辻　忠　一

今日の明け方ちょっと変った夢を見た。どこかの縁日で、一人の男が、口の高さに大きな鉄なべのようなものをすえつけて、何やらしゃべっていた。まわりにはあまり人だかりもなかったようだが、そのなべは妙に私の気をひいた。そこでは実に不思議なことが起っていたのである。直径七十センチ位の見事に錆びた鉄なべの前に、客を立たせて、精神統一をして自分をにらみつけるように、とその男は言う。客がにらむと、そのなべはかすかな、ちょうど遠くで聞く釣鐘のような音を発し、七秒程たつとわずかにひび割れがいくのである。するとその男は客に向って、あなたの精神力の強さはこれこれしかじかと説明している。ひび割れの度合によって測定するらしい。いわば一種の精神力測定器なのだ。つまり人間の身体から発するある種の超短波が作用して、そういう現象が起るらしい。夢と言ってもなかなか馬鹿にはならない。いよいよ私の番がまわってきた。大いに精神統一をしてその男をにらみつけた。なべが鳴った。ひび割れのいくのが見えた。さて結果はいかに、と言うところで目が覚めた。実に残念だが結果はわからない方がいいだろう。

夢の内容は以上のごとくだが、それからしばらく私は目が冴えて眠れなかった。それにしてもすばらしいことだ。しかし有り得ることだと思った。われわれはあまりにも日日、肉眼に見える世界のことだけをあくせくしているのではなかろうか。お互いにもう少し落ちつくようになると、もっともっと幸福な世の中がくる。人間の頭脳が考え出した究極が原水爆だとは、実にやりきれない。うしろから何かに追われている

ようだ。誠に大きいことを言うようだが、地球全体が一大転換期を迎えようとしているような気がしてならない。既成文化が根底から破壊されそうな気がする。

いつも思うのだが、仏様や聖人のうしろには後光がさしている。後光と言うのは身体から発する一種の磁気だと思う。仏様に限ったことはなく、われわれ一人一人それぞれ身体の周囲に磁場を持っているのだが目に見えないだけで、精密な磁気検波器が発明されたらきっと測定されるに違いない。そうなれば、幼児を誘拐して金を取ってやろうとか、あそこの家に強盗に入ってやろうとか考えている手合いの、身体から発する一種の妖気はたちどころに発見されるだろう。そしてやがてわれわれお互いの修養によって、そのような器械がなくても、相手が今何を考えているのか、顔を見たらただちにわかるようになるだろう。そこへ到達するためには何と言っても、ひとにらみしたら、鉄なべといえども音を出して破れるような烈しい気魄を持ちたいものだ。そして、悪い奴はびしびしやっつけて、住み良い世の中にしたいものだ。

もうこれ以上悲しいことが起る世の中はごめんだ。殊に幼児の誘拐は心底から腹が立つ。

（香里中高教諭・英語）

大学という名の衛星船

幸　日出男

「行きはよいよい、帰りはこわい。」というのは天神様の細道だが、アメリカあたりでは、大学は、入学するのは比較的容易でも、卒業するのはかなりむずかしいという社会通念があるらしい。大学は一般市民のものとして門戸は大きく開かれているが、しかし遊びに入るのではないのだから、入学しても、相当勉強せねば単位はもらえないということであろう。ところが、戦後の日本の大学は、市民のものという点は大分アメリカ型になったが、学生の方には、入学したからには卒業する権利があるというような意識があり、学校側にも、入学させたからには卒業させる義務があるというような気持があって、毎年多量の学士様がトコロテン式に社会に出てゆく。何度も落第点をつけて卒業をのばさせていると、いつのまにか教師の方が、相済まない気持になったりする。留学した人から聞いたのだが、学年最初の講義の時に、学生たちに向って、「みなさん、自分の席のまわりの人の顔をよく見ておきなさい。この中で学期の終りには三分の一しか残らないのですから。」などという教授がいるそうだ。かなりの勉強をしないと授業についてゆけないので、どんどん脱落してしまうらしい。日本では、一たん入学してしまうと、エスカレーターに乗ったようなものだ。もっとも、大教室での授業などではたしかに、学年はじめには教室にあふれていたのが、だんだん減ってゆくという現象が見られるが、それは脱落ではなくて、ただ出席者がへるだけで、最後の試験の時には、また、一ぱいあふれている。エスカレーターならば、少くとも自分の足をちゃんと乗せていなければならぬが、乗っていなくても、上に登れるというのだから、これはエスカレ

ーター以上のしろものである。

大学設置基準によると、一時間の講義に対して二時間の教室外学習をすることに定められているが、教室への出席もなされていないのだから、教室外の学習など全くのお題目にすぎぬ。試験の時には、他人のノートを意味もわからずにうつして丸暗記する。おかげで採点する教師は判じ物をとくような思いである。

昨年、ソ連は、人間が人工衛星から宇宙に出るという実験に成功したが、この写真を見ながら、僕は今の大学生を連想した。学籍という一本の細い命綱で結びついておりさえすれば、衛星船の外に出ていても大丈夫、宇宙旅行ができるというわけである。

星空を眺めていると、今日もたくさんの学生が、衛星船の外で、部活動その他のリクリエーションに、はたまた学生運動に、青春をエンジョイしている。あれはあれで、また、別の意味で有意義な勉強になっているのだと考えることが、衛星船の中にいる教師にとっての、せめてものなぐさめというものであろうか。

（神学部助教授・宗教学）

命を惜しむ

柏井忠夫

五月はじめの連休の一週間に山の遭難で死んだ人が六十人近くもあって、各方面の論議を招いている。数年前に国電三河島事故があったのも同じ時期のことであるが、それとこれとでは色々の点で相異が見られる。もちろん三河島事故の場合でも、運転士が信号を確認しさえすれば起こさずに済んだという点では、山の事故と共通しているが、ただしそのために命を失った多数の乗客にとっては、防ごうにも防ぐ道のない全くの災難である。その点では山の遭難事故は、犠牲者という受身の立場で考えるよりも、自分の不注意や過失によってひき起こした災害として、本人自身の責任が問われねばならぬ場合が多い。

特に今度の場合は天候の急変があったのではなく、当然計算に入れておかねばならぬ異常な気候に対して充分な準備や警戒を欠いたために起った遭難であるから、同情よりも非難が強いのも当然と言わねばならぬ。

それにしても一つ間違えば生命にかかわる危険な遊び――あえて遊びと言いたい――がほとんど無統制に放任されているのはなぜであろう。他のスポーツには厳格なルールがあり、出場資格があって、それに違反する行為があれば、相当の制裁を受けねばならず、時には資格を奪われることさえある。ひとり登山だけは資格の検定もなければ、制裁もなく、全く個人あるいは私的グループの自由な行動にまかされている。誰でも自分の命は惜しいから、無茶なまねはしないだろうといって、放任しておけない問題である。セーターにズック靴というハイキング姿で、雪に包まれたアルプスに登ろうとするのは、半ば自殺しに行くようなものであるが、誰もそれを制止し得る立場にある者がないとはどうしたことか。

わずかな経費を惜しみ、時間を惜しみながら、命を惜しむ気持を持たないのは、何としても間違った話である。そのようなま

ちがいは必ずしも山登りに限ったことはない。われわれの生活のそこここに犯されている間違いである。人は案外命を惜しまずに無茶な事をしている。自動車が走る凶器になり、ふぐを食べて命を捨てる人が跡を絶たない世の中である。

人間は命を惜しむ心を持たなければいけない。神から与えられたものの中でも、命は最も大切にしなければならぬものである。社会の人みんなが命を惜しむ心を持つようになれば、山の事故や交通事故も起こらないようになるであろう。そればかりではない、戦争も起こらないようになる筈である。

ヴェトナムにドミニカに、惜しげもなく青年たちの命を捨てさせるアメリカ政府の最近の動きを見ていると、無謀な山登りに出かける若者と同じような感じを抱かせられる。誰も制止する者がいないでよいのだろうか。命を惜しまないことを美徳として来た教育の誤りを、誰かが訂正しなければならない。今の世界を救うのは命を惜しむ人間である。

（神学部講師・新約釈義）

信仰の力と伝統

茂　洋

母校同志社が今年創立九十周年。現在奉職中の神戸女学院も今年が創立九十周年。共に風雪に耐えた伝統を誇る。しかも共にキリスト教の伝統、とりわけ組合教会主義の伝統を誇っている。

元来、私はこういう種類の伝統に強く反撥を感じている。伝統讃美の白々しい挨拶とか伝統を笠に着た講演を聞くたびに「今生きている私たちの問題はどうなるものだ。伝統では現在の問題に何の解決も与えることが出来ないではないか」という内からの強い声に満たされてしまう。とくにキリスト教信仰の伝統となると、その反撥の度合は、神学的根拠を伴って一層激しくなってくる。「伝統にたたかいを挑み、信仰の力を示したのが、プロテスタントの特長ではないか。いかなる権威にもよらない信仰をその特色としているのが、組合教会主義ではないか。信仰が伝統にたよるようになっては駄目だ」。

留学後、同志社教会伝道師として数年、そして神戸女学院に来てまた数年。伝統に対する私の反撥は少しも変らないのだが、ただその反撥が一面の真理であるといわざるを得なくなった。これは何も私が野党側から与党側にまわったからでもなければ、プロテスタント思想とりわけ組合教会主義を放棄したわけでもない。伝統のもつもう一つの面、新しい時代にかぐわしい香りを放つ伝統を見出したに他ならない。

やはり同じような長いキリスト教主義の伝統を誇るある学校が、大学を新設した。その時、そこに奉職した友人が話してくれたのを思い出す。「これだけの伝統をもつ学校で、しかも新しい大学生は、ほとんど全部その高校から上ってきたにもかかわらず、そして教師陣も半数以上キリスト者を迎えたにもかかわらず、大学でキリスト教々育をすることが、事の外困難である。私はあらためて伝統の尊さと力強さとを考えずにはおれない」。この話を聞いて私は驚

き、そして考えた。一方的な伝統への批判をなすとき、伝統に秘められた深みを見落しているのではないだろうか。批判をしながら、結局批判していた伝統擁護の弱さと同じ弱さを暴露しているのではないか。

信仰の伝統を考えるときそこには新しい時代に呼応出来なくて棄てられるべき点が多々あることは事実である。信仰の力は、いかに時代が変ろうとも、そのそれぞれの時代に新しく解釈されるべきものである。しかしまた信仰の伝統の中には、私たちの時間や空間の制限を越えて存在する永遠の力がある。「朽ちるものが朽ちないものを着る」姿こそ、伝統のもつ深みではないだろうか。一時的な信仰ではなく、幾時代にもわたって、風雪に耐えた信仰の伝統の中に、永遠の力があふれ出ているのだ。

伝統あるキリスト教主義学校で、キリスト教々育にたづさわる私たちの落ち入りやすい欠点は、伝統に依存してしまうことと、逆に全く伝統を無視してしまう二つである。しかし真実には、信仰の伝統の中にある永遠性に対する豊かな感受性にそ、私たちが見落してはならない点ばかりではなく、それこそ私たちの信仰に深みを与えてくれるものではないだろうか。

（神戸女学院大学助教授・基督教学）

命の季節に

山本栄美子

朝！　こんな街の中のささやかな住いの屋根にも、山鳩の柔らかい鳴き声がする。目を覚ましてじっと明るみを楽しんでいると、古びたこの家の窓のすき間から五月の朝特有の土と植物の香りが流れ込んで来る。部屋の中にその流れの帯が感じられる。

光はまだ雲を押しのけていないのだろうか……静かなあの鳩の吹きならす音にさそわれて、まだ深く沈んで重い意識がもちあげられる。東の窓をあけると昨夜は雨だったのか、お寺の裏庭・竹藪・その向こうのヒェイ山はまるで静かな湖の底にあったもののように映る。眺めていると何とも表現の出来ない仕方で活々とした力が、ゆっくりと脈打つ血液の中に入り込んで来るではないか。うれしい季節がまためぐって来た。土と水と太陽と緑が人間を大きく抱きかかえてゆたかに育ててくれる季節である。

山やお寺や小さな流れ、池や細い細い路、それらを幼い時からその住まいのごく近くに持ち、散歩を楽しむ事をおぼえた私は、年を経るに従って更に深く自然のみごとな業にうたれるようになった。雨が降りしきっていても、くもっていても、もちろん美しい天候の時、一人でそれらの中を歩く生活を楽しんだ。忙がしく、さわがしく、悩み多い日々であったが、心ゆくまで歩いて味わい、みつめ、休息した後に家路にたどりつく私の内にはいつもやすらぎがあった。

山をけずりとって作った細い尼寺への路を、五月のある朝、いつものように歩いていた。その日も前夜は雨、見上げる山のその壁に、「シダ」が若々しく美しい。苔をつたって輝く水滴が落ちて集まり、足もとのくぼみに深く留まっている、その透明な

世界！　光が長くその中をつらぬき、それを見つけた時のおどろき、喜びは今も忘れられない。こんなに素晴らしい、清らかな美の世界が、私一人の前にある！　そしてそれが一人の人間を洗う。

あれから三年、しかしその事は今も活々とあたらしく忘れられない五月の思い出である。

何時だったのか？　ささやかに並んだわが家の宝、植木の鉢に美しいたくましい葉が朝毎にのびる。小さな鉢のまわりには苔がびっしりと生えあふれるばかりだ。毎朝毎朝見るこの小さな窓のむこうの自然のたたずまい。一列に並んだこの植木鉢、これだけの事だが、朝毎のおどろきは大きい。

山やお寺や、小さな流れ、池や細い細い路と友達であった昔ながらの住みなれた家を離れ、電車や自動車、工事の音、アスファルトにかこまれた街の中に住まねばならないと決った時から、そんな自分はあり得ないと力を失せて半年をすごしたものだ。が、あたらしくはじめたこの住まいの生活に第一回目の五月がめぐって来た時、カコの自然の中での生活から汲み取っていたあらゆるものがよみがえって、力となってくれたのを思う。以来、一人で歩いて得た山や小路での喜びやおどろき、力となったものは、今も生活の中に生きつづけており、それは、どんな時にもみどりの一鉢をだきかかえて離さない私たちの生活へと発展した。再び、今年も土と水と太陽と緑がこの上なく美しい命に溢れた季節がめぐって来た！

お寺の庫裏からあったかいみそ汁の香りが、隣りから子供のさけび声。五月の朝はすっかり明け、人々の活動が次第に早さを増して、はじめられる。

（校友・同志社教会教師）

酒詰教授遺句抄について

原　柯城

故酒詰教授は土岐光風の俳号にて句に親しまれ、私の主宰誌『風雪』に毎月その収獲を発表されていました。

ここに、故教授の句の一端を紹介し、御冥福を祈るものであります。

（昭六大経、馬酔木同人）

故酒詰仲男教授遺句抄

鵜の巌を傾けつくす大き濤

鵜の巌をめがけて濤の追ひあえる

濤を追ひ飛魚たたす船の水尾

甲板椅子低し日傘の影ゆれて

池の面の塔の空なり蓮咲ける

巡礼の背に負ひ去るや蟬時雨

冬濤にしばらく沈む巌畳

濤呼ぶと崖まろびゆく落椿

海まぶし蜑の家囲ふ椿垣

雪解あと野焼き山焼き湖北村